

受 験 番 号

国 語

(100 点 60 分)

(2026 年度 一般入学試験 A-1)

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子の表紙の受験番号欄に受験番号を書いてください。
複数の受験番号がある場合、受験票に記載されているメイン受験番号を記入してください。
- 3 この問題冊子は表紙を除き、16 ページです。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせてください。
- 5 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、正しく記入してください。
 - ① 氏 名 欄 漢字氏名を記入してください。
 - ② 科 目 名 欄 「国語」と記入してください。
 - ③ 受験番号欄 受験票に記載されているメイン受験番号を記入し、その下のマーク欄に、正しくマークしてください。
- 6 受験番号が正しく記入されていない場合は、採点されないことがあります。
- 7 解答は、解答用紙の解答マーク欄にマークしてください。
例えば

20

 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の（例）のように **20 の解答マーク欄の③にマーク**してください。

(例)

	解 答 マ ー ク 欄											
20	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	-	⊕

解答マーク欄に複数のマークをすると、不正解になります。訂正するときは消しゴムできれいに消して、書き直してください。

- 8 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいませんが、どのページも切り離してはいけません。
- 9 不正行為について
 - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
 - ② 不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者が注意します。
 - ③ 不正行為を行った場合は、その時点で受験を取りやめさせ退室させます。

国

語

(解答番号

1

5

35

)

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～問11）に答えなさい。（1～17は段落番号を表します）

1 ときどき大学の若い理系研究者から、音楽が細胞に及ぼす影響をめぐる実験について、相談を受けることがある。そういうときいつも私は、まず「音楽」と「音」（波動）のA的な違いから説明することになっているのだが、すぐにはわかってもらえないことが多い。

2 私の解説の定番は次のようなものだ。つまり物理的に存在しているのは「音」（空気振動＝波動）だけである。「音楽」は物理的存在ではない。耳が知覚した音の羅列を、人間は精神の中で意味関連としてB的に組み立て、認識する。それが音楽である。単なる音の継起にすぎないものが、人間の意識の中で初めて「音楽」という有意義なまとまりに「なる」。その意味で音楽は外界にC的に存在しているものではない云々。

3 例として言語のことを考えてみよう。コ・レ・ハ・ミ・ケ・ネ・コ・デ・ス——何のことかわからない。文法を知らない人間が聴いても、これら一つ一つの音がどういうまとまりになっているのかわからない。「コレ・ハミ・ケネ・コデ・ス」と聞こえてしまうかもしれない。音韻という「点」を耳で知覚できていても、それが有意義なまとまりを成さない。分節もされない。

4 こうした単なる音の継起は、意識の中で文法システム等を通すことによって初めて、「ことば」になる。文法を知って初めて、「これは三毛ネコです」という文章に聞こえてくる。その意味では、¹言葉も音楽も、意識の中にしか存在していない。文法規則をインプットされている人間の意識の中で初めて、²それは言葉ないし音楽として立ち現れてくる。

5 文法を知らない人間にとって、言語も音楽もただのサウンドである。たとえば私は——とても恥ずかしいことだが——多くの日本人と同じく邦楽に^aクワしくないから、雅楽などを聴いても単にピヤーンと延々「音」が鳴っているようにしか聞こえない。意味のあるまとまり、すなわち「音楽」として聴こえない。いつまでも「音」の羅列のままである。中国語もまったく知らないから、これまたサウンドとししか聞こえない。

6 文法を知って初めて「音の羅列」は「音楽」として聴こえてくる——これを言い換えるなら、文化的社会的に文法を叩きこまれた人間にのみ、音楽は音楽として立ち現れてくるということである。音楽が音楽に聴こえる前提は「文化的に刷り込まれ^しられていること」だと言ってもいい。生まれたての赤ん坊のような白紙の状態では、音楽は音楽には聴こえてこない。逆に言えば、（注1）ヒーリング音楽とか（注2）音響熟成などの背後には、「音楽を認識する」という行為を再び、赤ん坊のときの「単なるサウンドの知覚」という文化的刷り込み零レベルに^bカンゲンしようとする発想がある。

7 私は音が細胞に与えるだろう影響を決して否定しているわけではない。音は空気振動であり、「空気の震えが鼓膜に触れる」という意味で、聴覚は聴覚の延長である。魚群探知機などは聴覚による認識作用を利用したものとも言え、また視覚がほとんどない蝙蝠が超音波を出して自由自在に飛行し、獲物となる昆虫を捕食することもよく知られている。彼らは音でもって環世界（自分を取り巻く世界）に触っている。

8 同様に超音波治療もまた、身体を切開することなく、身体の奥に触れて治療するということであろう。音が鳴るということは空気が振動しているということであり、音に細胞をさらすということは、D的に音で細胞を触っているのと同じことなのだ。細胞が光に反応するのと同様、

細胞が音に触れられて反応するのは当然である。とりわけ「快・不快」という次元では大きな影響があるはずである。波動周期(リズム)やスペクトル分布(要するにどのような倍音が含まれているか)も、細胞の活動に大きく影響すると思う。

9 音が生命体に与える快・不快の感覚については、たとえば野良ネコが菜園を³トイレ代わりにしないよう、赤外線でネコの侵入を察知すると人間には聞こえない超音波を出して追い払う装置などが、すぐに思い出される。最近ではこの原理を応用したモスキート波なるものも開発されているらしい。不良どもが深夜に公園にたむろして悪さをしないように、二十歳を超えた人間にはほとんど知覚できない高周波の音波を流すのである。野良ネコもヤンキーも同じ生物だから、同じ音波で追い払えるというわけだ。

10 野良ネコと同じ扱いをされるヤンキーには同情してしまうが、冗談ではなく、⁴「生命体に音で働きかける」という発想にはどこか、人間を実験動物扱いするがとき非人間的なものが隠れていることを、ここでは指摘しておきたい。

11 「音楽」か。それとも音楽以前の「音そのもの」の知覚か。こういう議論で必ずサンショウウされるのが、二〇世紀後半のアメリカの有名な前衛作曲家ジョン・ケージだ。近代のコンサートホール文化が、「聴く」楽しみを「音楽」に限定してしまうことを、ケージは繰り返し批判した。たとえばベートーヴェンの交響曲を演奏している最中にも、「音楽」以外の「音」は——どれだけ聴衆が静かにしていても——必ず聞こえているはずだ。咳払い、空調、身動きする気配、隣の客の息づかい等々。しかしふだんの私たちは「曲」音楽」にばかり気を取られ、それ以外の物音をすべてスルーしている。こんなふうに「聴く」対象を「世間で『これが音楽だ』とされているもの」に限定してしまうことなく、世界を満たしているさまざまなノイズに向けて耳を開こう。——これがケージの主張であった。

12 ケージの《四分三十三秒》についてはよく知られている。ピアニストがステージに出てくる。やおら^dフトコロからストップウォッチを取り出し、時間を測り始める。そして……何も弾かずにそのままピアノの前に座り続ける。四分三十三秒たったところで彼は立ち上がり、客にお辞儀をしてから楽屋に再び退く。⁵ こういう「作品」である。

13 なおケージによれば、《四分三十三秒》は必ずしもホールのピアノを前にやる必要はなく、また時間枠も正確に四分三十三秒でなければならぬわけではない。たとえば彼自身があるとき近くの森の素晴らしい見晴らしの場所で、この「曲」を自分で自由に「演奏」したところ、それは筆舌に尽くしがたい素晴らしい体験であったという。またケージはサボテンが密かに発している「音」をマイクで拾って「曲」にしたり(タイトルは『樹の子供』という)、キノコの胞子が落ちる音をなんとか聴こうとしたりもした。(中略)

14 ⁶単なる「サウンド」は「音楽」ではないと固く信じている私だが、ケージの思想が従来の音楽概念への批判としてきわめて有効だったことは認める。クラシックを中心とする西洋の近代音楽は、あまりにも聴く喜びを「世間で『これは音楽だ』と認定している音楽」に限定しすぎてきた。ピアニストがちよつと予定外のノイズ(ミスタッチ)をたてただけでも「ダメ!」。ちよつと咳をしただけで他の客ににらまれる。客席のざわついた気配も歓迎されない。音楽自体に集中しなければいけないのだ。だからこそ西洋文化は一九世紀以後、「コンサートホール」という、すべての雑音をシャットアウトして、音楽の聴取だけに。センシンできる建築形態を発明した(ちなみにコンサートという制度ができたのは一八世紀末のイギリスであ

る。

15 しかしよく考えてみれば、まったくノイズレスな沈黙の中でモーツアルトの交響曲を聴いたとして、はたして楽しいだろうか？「音楽」という「図」は、「ざわつき」という「地」から浮き上がってくるのではないか？「ざわめき」こそが、音楽という樹がその根によって養分を吸い上げてくるところの、不可欠の土壌のようなものではないのだろうか？

16 ありとあらゆる古今東西の音楽は、その背後の「ざわめき」と常に共生してきた。人々がダンスのステップを踏む音、野外で演奏されるとき風の音、祭りの雑踏、ライブハウスで店の人がドリンクのための氷をコップに入れる音、ときおり外から聞こえてくるかすかな車の音。音楽を比類なくわくわくさせるのは、実はこうしたざわつきではないのだろうか。

17 音楽は音楽だけで存在しているのではない。音楽は場の気配の中から湧き上がってくる。簡単に「場」から切り取って単独で自宅に持ち帰れるものではない。海外の旅先で味わった素敵な酒や料理を、それだけ切り取ってパッキングして日本まで持って帰ってきてても、きつとあまりおいしくないのと、これは同じである。音楽も酒も料理も場所の空気や人々のざわつきという布の中に織り込まれているのだ。

(岡田暁生『音楽と出会う——21世紀的つきあい方』による)

(注1) ヒーリング音楽＝心身の疲れを癒やす効果が期待できる音楽のジャンル。

(注2) 音響熟成＝音楽の微振動によって液体や木材に変化をもたらす技術。

問1 傍線部a～eのカタカナにあたる漢字と同じ漢字を含むものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

〔解答番号〕 1 5

- a クワしく
- 1
- ① 損害をベンシヨウする。
② シヨウサイに説明する。
③ シヨウジ戸を開ける。
④ シヨウキをつかむ。
⑤ シヨウソウにかられる。

e
セン
5

d
フトコロ
4

c
サンショウ
3

b
カンゲン
2

- ⑤ ④ ③ ② ①
- 理論をジッセンに移す。
センブウを巻き起こす。
センズで涼をとる。
社会学をセンコウする。
オンセンに入ってくつろぐ。

- ⑤ ④ ③ ② ①
- 徹夜でケイカイにあたる。
カイチュウ電灯を常備する。
病人をカイジョする。
カイダンを踏み外す。
キンカイを掘りあてる。

- ⑤ ④ ③ ② ①
- サンチを偽装する。
ダサンがはたらく。
ストレスをハッサンする。
大企業のサンカに入る。
神社にサンケイする。

- ⑤ ④ ③ ② ①
- カンレキを迎える。
カカンに戦う。
初志をカンテツする。
カンダイな心で接する。
努力がカンジンだ。

問2 空欄 A ～ D を補う語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。(同じ番号を二度以上選んではいけません。)[解答番号 A 6、B 7、C 8、D 9]

- ① 実質 ② 根本 ③ 身体 ④ 分節 ⑤ 物理

問3 傍線部1「言葉も音楽も、意識の中にしか存在していない」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。[解答番号 10]

- ① 人間の意識の中で、物理的な音の継起が言葉や音楽として認識されるためには、その音自体に意味や文法が含まれていなければならないということ
② たとえ耳が知覚した音の羅列を言葉や音楽として理解できたとしても、その文法がインプットされていなければ、正確には理解できないということ
③ 耳が音の羅列を知覚した場合、精神の中でそれを有意味なものとして文法的に捉えることができれば、言葉や音楽としては認識されないということ
④ 言葉や音楽を文法に則った有意味なまとまりとして耳で知覚したとしても、実際にそれらを理解できるのは精神の中においてであるということ
⑤ 文法を知らない人間にとって言葉や音楽はただのサウンドであり、逆に文法を知っていれば、どんな物理的な音でも言葉や音楽に聞こえてくるということ

問4 傍線部2「それ」の指示内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。[解答番号 11]

- ① 単なる音の継起
② 文法システム
③ 「これは三毛ネコです」という文章
④ 言葉や音楽
⑤ 人間の意識

問5 傍線部3「トイレ代わりにしないよう」は下のどの語句にかかりますか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

〔解答番号 12〕

- ① 赤外線
- ② 察知する
- ③ 聞こえない
- ④ 追い払う
- ⑤ 思い出される

問6 傍線部4「生命体に音で働きかける」という発想には……隠れている」とありますが、この「非人間的」な「発想」に基づくものとして筆者があげているものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 13〕

- ① 雅楽
- ② 中国語
- ③ ヒーリング音楽
- ④ 魚群探知機
- ⑤ 超音波治療

問7 傍線部5「こういう『作品』である」とありますが、作品にカギカッコ（「」）が付けられている理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 14〕

- ① ケージの《四分三十三秒》は、過去の多くの作品を凌駕するほどの、きわめてすぐれた作品であるから。
- ② ケージの《四分三十三秒》は、これまでも多くの論者によって取り上げられ、批評されてきた作品であるから。
- ③ ケージの《四分三十三秒》は、これまでの作品とは異質であるとはいえ、その高い価値が認められているから。
- ④ ケージの《四分三十三秒》は、演奏時間や場所など、ある程度の自由を作曲家自身が認めた作品であるから。
- ⑤ ケージの《四分三十三秒》は、音楽と言ってよいかためらわれるほど、普通の音楽の概念からはずれているから。

問 8 傍線部 6 「単なる『サウンド』は『音楽』ではない」とありますが、筆者がこのように述べる理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 15〕

- ① 音楽というものは、人間によって音楽として認識されて初めて音楽になるのであるから。
- ② サウンドは単なるノイズにすぎず、音楽に必要なメロディやリズムなどが欠けているから。
- ③ 音楽は、音楽以外のサウンドをノイズとして消去して初めて音楽として聴こえてくるから。
- ④ 音楽には文法が不可欠であり、これを備えていないものは単なるサウンドにすぎないから。
- ⑤ 音楽は音楽だけで存在しているのではなく、場の気配の中から湧き上がってくるものだから。

問 9 傍線部 7 「『地』とほぼ同じ意味で用いられている本文中の語を、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 16〕

- ① 音
- ② 意識
- ③ 身体
- ④ 沈黙
- ⑤ 場

問 10 本文を前半と後半に分けるとすれば、後半はどの段落から始まりますか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 17〕

- ① 7 段落
- ② 9 段落
- ③ 11 段落
- ④ 13 段落
- ⑤ 15 段落

問11 筆者は音楽についてどのように考えていますか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

〔解答番号 18〕

- ① 音楽は単なるサウンドやノイズではなく、文法に則った音の羅列であるから、精神を集中して聴かなければ音楽として認識することはいきない。
- ② 音楽は本来その背後にあるざわめきの中から聴こえてくるものであるが、その前提として音楽を音楽として認知するための文化的刷り込みが必要である。
- ③ 音楽を西洋の近代音楽に限定すべきではなく、音楽の背後にあるざわめきも音楽であり、さらにはケージの《四分三十三秒》も立派な音楽である。
- ④ まったくノイズレスな沈黙の中でモーツァルトの交響曲を聴いても楽しくないように、音楽はやはりCDなどではなく、なまで聴いてこそ感動も深まる。
- ⑤ 私たちは音楽を聴く場合、音楽にばかり気を取られ、それ以外の物音をすべてノイズとしてスルーしてしまうが、その物音の聴取にこそ心を集中すべきである。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～問10）に答えなさい。

年に2回、直木賞や芥川賞の受賞者が発表されますが、その受賞会見はテレビや新聞などで大々的に報道されます。その様子を見てみると、時々、土中のモグラが急に太陽の下に出てきた時のような、そんな姿を思い出すことがあります。大変、失礼な表現ですが、決してネガティブな意味で言っているわけではありません。

普段テレビで見ている人たちの多くは、人前での立ち居振る舞いも自然で、見られることに抵抗がないように思えます。自らタレントになろうというのだから、それはそうなのでしょう。一方、世の中には当然そうでない人もいます。私は職業柄、人前で話をする機会が多いのですが、実はもう圧倒的にモグラ派人間です。スポットライトのようなものが、とても苦手です。（1）

私もこうして本など書いているので物書きの端くれということになるのですが、文章を書くという作業の良い所は、一人でできる、ということ。誰に会わなくとも、他人との意見調整も必要なく、基本的には自分だけで作業が完結します。こういった他人とのつながりが切れた、独立性と言えよいか、ある種の孤独と言えよいかわかりませんが、そういうものが文章を^a綴ぎだすことに必要な要素として存在しているのではないかと、時々思います。自分を直木賞や芥川賞の受賞作家と並べて語るのも大いに^{はばか}憚られますが、受賞会見で時々見るあの「モグラ感」には、なにか¹そのような要素を感じ、親近感を持つてしまうのです。

人間は社会的な動物で、どんな人も自分以外の人間とのつながりの中で生きています。みんなと同じユニフォームを着たり、同じ色の鉢巻をしたり、そういった皆が同じことをすることで得られる一体感には、どこか気持ちをも^b高揚させてくれる所があります。いろんな人と知り合いになれば、情報も多く入ってくるし、視野も広くなり世界が広がります。現代社会は情報社会であり、情報弱者は社会的弱者です。実際、他とつながり、より多くの情報を持てば、いろんな選択や判断に有利なことは多いでしょう。「²モグラ感」なんて、一体、何に必要なのでしょうか？

しかし、です。極端な言い方になっているかもしれませんが、人は何かを知ってしまうと、知らない状態にはもう戻れません。それは、^c侮れない真実です。他人と共有する情報が増えていけばいくほど、自分の感性や考え方がそういった「常識」に感化されるようなことが起こります。

（イ）、何かの集団とのつながりが密になれば、周囲との関係で自分の行動が制約されることも起こります。（ロ）新型コロナウイルス対策のマスク着用義務も解除となり、もう外に出る時にはマスクをしなくてもいいはずですが、周囲がみんなマスクをしていると、してない自分がどこことなく居心地悪く感じてしまいます。日本は同調圧力が他国に比べて高いと言われていますが、こういった右へ^d倣え的な行動が「つながり」の中では重視されてしまうのです。（2）

世の中には、私も含めて、そういったものにうまくなじめない人がいます。みんなの考えになじめない。みんながすることにもうまく同調できない。（ハ）「モグラ」的になっていく。しかし、それは本当に良くないことなのでしょうか？ いくら同じように振る舞ってみても、実際にはみんなが同じであるはずはありません。なにかなじめない、本当はそれで良いのではないかと思うのです。³それがその人固有の感性であり、個

性です。そこに他の誰にも書けない、あなただけの文章が生まれる可能性が眠っているのです。文章を書くという行為は、もちろん外からのインプットも必要ですが、より大切なことは自分の内部で何かを作り上げる作業です。それは作曲家が自分だけのメロディーを生み出すように、人まねではなく、どこかで聞いた話をつぎはぎするのでもなく、自分の言葉で、何かを紡いでいく作業です。そこでは他から独立した時間や精神のようなものが何より大切で、いつそ土中にもぐって日光や新鮮な空気からも遮断されたような時空間が、その作業には適しているのかもしれない。だから隠しても隠しても「モグラ感」が出てきてしまうのです（……ような気がします）。（3）

SNSやなんやで「つながり」とか「絆」がもてはやされる時代ですが、他から「独立している」という要素は実はとても大切なものです。⁴ 付度とか、空気を読むというような振る舞いは、日本社会では常識となっていて、周到な根回しをして波風を立てず事を進めて行くのが日本の文化です。（二）、「つながり」を持った集団は良くも悪くも同じ論理や価値観を共有しています。そういった内輪だけで物事が決まると、しばしばそれは「暴走」のようなことを引き起こします。それは車で言えば、アクセルしかついていないような状態になるからです。中学生の時だったか社会の教科書を読むと、戦前にできた「大政翼賛会」に関してネガティブに書かれていて、みんなが賛成して協力しようというものなのですが、どこに問題があるのか？ と不思議に思った覚えがあります。それは結局、第二次世界大戦、そして敗戦へと日本を導くものになるのですが、そういったファシズム的なものに異を唱える存在、つまり異なった価値観でものを言える存在がない社会になってしまったことが問題だったのです。

（4）

少し話は変わりますが、ドイツ生まれの哲学者ハンス・ヨナスが提唱していた生命観は独特で、⁵ この文脈で興味深いものです。ヨナスは細胞膜を通して物質が出入りする代謝、すなわち必要なものを環境から取り入れ老廃物を排泄^{はいせつ}することで、膜の内部に「特有の空間」を保持できるところが、生命の本質と考えました。生命の代謝起源説と呼ばれるものです。そのような代謝を可能とする膜を持つことにより、周囲の環境に依存して増殖していた状態から、その適した環境を膜の中に作り自由に移動することが可能な存在になったとしました。つまり膜により生命は「自由」を手に入れましたが、同時に膜が破壊されることで訪れる「死」の宿命も背負うようになったと提唱したのです。この膜という境界により内部と外部を分けることで「生」を定義するシンプルな概念モデルは、生物の細胞だけでなくさまざまな事象に適用が可能です。内部環境が外部と異なった状態で維持されている状態が「生」、内外の区別がなくなれば、それは「死」です。

（ホ）この生命の概念に基づけば、より大きな集団の価値観の中に同化することは、その人の個性の「死」を意味します。ファシズムのような熱狂はそういった「屍」^{しかばね}を次々と吸収して巨大化していくモンスターのようなのかもしれないかもしれません。何かを創作する者にとっても⁶ そういった「境界」の崩壊は、まさにクリエイターとしての「死」であり、それに抗^{あらが}って自己内側の密度を保たなくてはなりません。（5）

だから「独立している」ことは、「敵対する」とことと根本的に違います。単にその対象とは異なった論理や価値観といった、違う内容物で内部が満たされているということです。外界の環境と無関係に、特有の「自己」に忠実でいられるということなのです。人間社会においては、そういった独立したものの存在が、物事の健全な発展や改善のために、実はとても重要です。価値観を共有した集団内であれば合意は簡単で、確かに物事

はスムーズに進みます。しかし、人間がやることには誤りがつきもので、違う価値観で動いているものからの指摘がなければ、7それに気づけないことも多々あります。そういった自分たちと違う価値観からの指摘を入れて修正を繰り返すことで、物事は少しずつ発展、進歩していきます。

なかや しきひとし
(中屋敷均『わからない世界と向き合うために』による)

問1 傍線部a～eの漢字の読みが間違っているものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 19〕

- ① a 紡(つむ)
- ② b 高揚(こうよう)
- ③ c 侮(あなど)
- ④ d 倣(そろ)
- ⑤ e 遮断(しやだん)

問2 空欄(イ)～(ホ)を補う語として最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。(同じ番号を二度以上選んではいけません。)[解答番号 20、21、22、23、24〕

- ① だから
- ② つまり
- ③ ところで
- ④ たとえば
- ⑤ しかし
- ⑥ また

問3 傍線部1「そのような要素」の具体的な説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 25〕

- ① 本などを書いている、物書きの端くれ
- ② 他人との意見調整や人とのつながり
- ③ 独立性、あるいはある種の孤独
- ④ 直木賞や芥川賞の受賞作家と並ぶこと
- ⑤ 受賞会見で時々見る、あの「モグラ感」

問4 傍線部2『モグラ感』なんて、一体、何に必要なのでしょうか？」について、次の(i)、(ii)の各問いに答えなさい。

(i) 「モグラ感」の具体的な説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 26〕

- ① 直木賞や芥川賞の受賞会見といった晴れの舞台に出たときの、うれしくも恥ずかしい感じ
- ② みんなと同じユニフォームを着たり、同じ色の鉢巻きをしたりすることになじめない感じ
- ③ 情報弱者であるために、いろんな選択や判断にあたって迷ったり決断できないでいる感じ
- ④ いつも独り閉じ籠もっていた者が、突然人前に出たために、戸惑いを隠せないでいる感じ
- ⑤ 人前での立ち居振る舞いがたいそう自然で、見られることに抵抗がないように見える感じ

(ii) 「モグラ感」は何に必要なのですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選びなさい。(解答の順序は問いません)〔解答番号 27・28〕

- ① 外からインプットするだけでなく、自分の内部で何かを作り上げること
- ② 多くの情報を手に入れて視野を広げ、有利な選択や判断をおこなうこと
- ③ 人前での立ち居振る舞いが自然で、見られることに抵抗がなくなること
- ④ みんなが共有する論理や価値観に疑問を持ち、それから距離を保つこと
- ⑤ 情報社会と言われる今日、社会的弱者である情報弱者にはならないこと
- ⑥ 集団内で「常識」となっている考え方や価値観に激しく敵対すること

問5 傍線部3・7の「それ」がそれぞれ指示する語句として最も適当なものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

〔解答番号3〕 29、7 30 〕

3 「それ」

- ① 「モグラ」的になっていく
- ② 本当によくないこと
- ③ みんなが同じである
- ④ なにかなじめない
- ⑤ 本当はそれで良いのではないか

7 「それ」

- ① 独立したものの存在
- ② 物事の健全な発展や改善
- ③ 合意
- ④ 誤り
- ⑤ 違う価値観

問6 傍線部4「忖度」のここでの意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号31〕

- ① 他人行儀によそよそしく振る舞うこと
- ② 他人の心情を推し量り、配慮すること
- ③ 他人に率先して素早く行動すること
- ④ 他人に対して馴れ馴れしくすること
- ⑤ 他人の意見にむやみに同調すること

問7 傍線部5「この文脈」の具体的な説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 32〕

- ① 文章を書く行為は、作曲家が自分だけのメロディーを生み出すように、自分の言葉で何かを紡いでいく作業であるということ
- ② 戦前にできた「大政翼賛会」のようなファシズム的なものが「暴走」して、社会の「つながり」や「絆」を分断してしまうこと
- ③ 「つながり」や「絆」がもてはやされる時代、集団の中での孤立を恐れて、みんなと同じ論理や価値観を共有すること
- ④ 直木賞や芥川賞の受賞者が、受賞会見でスポットライトを浴びると、隠そうとしても「モグラ感」が出てきてしまうこと
- ⑤ みんなの考えになじめない、みんながすることにもうまく同調できないでいると、人は「モグラ」的になってしまうこと

問8 傍線部6「そういった『境界』の崩壊」に該当する本文中の語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 33〕

- ① インパクト
- ② 人まね
- ③ モグラ感
- ④ 孤独
- ⑤ 他人との意見調整

問9 本文から次の文が抜け落ちています。どこに戻すのが最も適当ですか。後群の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 34〕

それが独立しているということなのです。

- ① (1)
- ② (2)
- ③ (3)
- ④ (4)
- ⑤ (5)

問10

本文は『モグラ』の心意気」という小見出しが付いた文章の一節です。本文の内容に基づけば、『モグラ』の心意気」とはどのようなものと考えられますか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 35〕

- ① 戦前にできた「大政翼賛会」のようなファシズムが復活のきざしを見せ始めている今日、このような社会情勢に目を背け、モグラのように他人とのつながりを断ち切って、孤独のうちに生きようとするもの。
- ② みんなが価値観を共有する集団内において、合意が簡単に形成されて物事がスムーズに進んでいる今日、それに甘んじることを自らに許さず、集団の外に飛び出し、何かを作り上げようとするもの。
- ③ 戦前にできた「大政翼賛会」のようなファシズムが荒れ狂う時代とは違い、誰もが自由に発言したり行動したりできる今日、直木賞や芥川賞の受賞者のように、自分も何かで一旗揚げようとするもの。
- ④ もぐらのように土中にもぐって日光や新鮮な空気からも遮断されたような時空間を確保することが可能な今日、孤独の中で、集団の価値観との敵対を意識しながら自己の内側の密度を保とうとするもの。
- ⑤ 人々が付度したり、空気を讀んだりして、集団の支配的な考え方や価値観に順応しようとしている今日、それに染まらず、自分なりの考え方や価値観を唱えて、社会の趨勢を是正しようとするもの。